

氏名	仲井眞建一
学位の種類	博士(文学)
報告番号	乙第359号
学位授与年月日	2022年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	「読む」ことを問う死者たち ——「沖縄文学」における吊いを中心に——
審査委員	(主査) 石川 巧(立教大学大学院文学研究科教授) 川崎賢子(立教大学大学院文学研究科特任教授) 新城郁夫(琉球大学人文社会学部教授)

# I. 論文の内容の要旨

## (1) 論文の構成

序章 沖縄文学をめぐる解釈

第一部 目取真俊／解釈の拒絶を読む

第一章 目取真俊「風音（一九八五年）」論——「幼い性器」である死者と、食物としての死体

補論 目取真俊「風音」の改稿について

第二章 目取真俊「面影と連れて」論——「光」の記憶を〈聴く〉

第三章 目取真俊「魂込め」論——新城郁夫／ウタ、「祈りは届かなかった」場所に佇むこと

第四章 目取真俊「希望」論——「死体の傍ら」で〈私〉は希望を紡ぐ

第二部 「読む」ことを問題化する死者たち

第一章 又吉栄喜「ギンネム屋敷」論——「悲鳴」を提示する「握りこぶし」

第二章 又吉栄喜『巡査の首』論——追悼・祭祀のポリフォニー

第三章 崎山多美「水上往還」論——「島」を読む〈私〉

補論 辺見庸『1★9★3★7』論——「できごと」を継承するために

終章・結語／死者の不在を「読む」こと

初出一覧

参考文献一覧

## (2) 論文の内容要旨

本論は、沖縄在住の作家たちによる文学的営為である「沖縄文学」がどのような状況のなかで生成し、これまでにどのような蓄積がなされてきたかを検証するものである。文学テキストの分析を通して日本と沖縄との関係に刻まれている中央／周縁の強固な構造を可視化し、その特殊性が強調されることで常に日本の他者として表象されてきた沖縄、「出逢うための他者」としてフェティッシュなまなざしを注がれる沖縄を考察するとともに、そうした「他画像」に抗いながら〈沖縄で書くこと〉の意味を問い続ける作家たちの文学的営為を検証し、そこに表現された「自画像」を析出しようとするものである。

この問題を探究するために、本論では 1990 年代以降の「沖縄文学」において「出来事」の記憶およびその継承が重要なモチーフになっていることに着目し、死者とその弔いの表象を論じている。生き残った者たちが死んだ者たちを意味づけていく過程において、さまざまな「解釈」の失敗が繰り返されていることに注目しながら同時代の「沖縄文学」を分析し、そこにさまざまな過誤、認識不足、過剰な意味づけが生じていることを明らかにしている。また、死者を解釈することに失敗する者たちが描き込まれたテキストを読むという行為を通じて、読者もまた不安定な〈場〉に身を置かざるを得なくなることを指摘し、記

憶や経験として明確な位置付けすら与えられない「出来事」性の問題を論じている。

第一部では、戦後沖縄の政治的状況、および、戦後日本が沖縄に強いてきた「他画像」のありようを鋭く批判し、〈沖縄で書くこと〉の問題を考え続ける作家としての目取真俊に焦点をあてている。第一章では「風音」を論じている。作品の舞台は、風葬場に、「泣き御頭」と名付けられた特攻隊員の頭蓋骨を安置する沖縄県北部の風葬場である。「泣き御頭」で度胸試しをするアキラ、本土から取材に来た藤井、かつて「泣き御頭」から万年筆を盗み負い目を感じている清裕といった登場人物が、死者のメッセージや死の意味などをさまざまに解釈することで物語は駆動する。論者は、この作品が『沖縄タイムス』に掲載された時期に中曽根首相の靖国神社公式参拝（1985年8月15日）が行われるなど、戦死者の追悼と慰霊を行う主体としての国家のありようが問題化していたこと、沖縄における遺骨収集の議論などを踏まえ、死者との「観念的關係」（小泉義之、1997年）を結ぼうとする行為の欺瞞性と、生き残った者として死者との断絶を生きようとするものの対立を論じている。また、補論「目取真俊「風音」の改稿について」では、初出、改定版の改稿過程を精緻に検証したうえで、長編小説『風音 The Crying Wind』（2004年）のラストシーンが初出版から大きく書き直されていることを論じている。

第二章は「面影と連れて」論である。沖縄県・北部の村で「部落の神女」である「おばあ」とともに暮らす「うち」は、小学校でイジメを受ける日々のなか御嶽の森で過ごすようになる。だが、やがて「魂」のことばを「聴く」ようになった「うち」は、死者を鑄型に嵌め込もうとする暴力的な解釈をも引き受けざるを得なくなり、自らの身体そのものを放棄してしまう。論者はこうした「うち」の態度を、いまここにいない存在＝不在の他者を身体に受容する行為と規定し、「聴く」という行為が必然的に暴力までも呼び込んでしまうことを明らかにし、「うち」の被傷性を論じている。なお、この作品には沖縄海洋博、ひめゆりの塔事件、松永優裁判などが参照されているが、論者は沖縄を撮り続けた写真家・中平卓馬が「写真それ自体はなんら意味を持たないにも拘わらず、権力の意味体系へ接続されてしまう」と指摘していることに示唆を受け、〈聴く〉相手を必然的に要求する「うち」の〈語り〉は、〈聴く〉ことに頼ってしか示すことのできないもの、すでに無くなってしまったものの「面影」を臍げに立ちあげると結論づけている。

第三章では「魂込め」を論じている。「魂込め」は、幸太郎という男の口にアーマン（大ヤドカリ）が入り込むという事件からはじまる。村の民間霊媒師であるウタは、幸太郎の魂を戻すための「魂込め」を行うがうまくいかず、さまざまな解釈を試みた挙句、アーマンは幸太郎の母・オミトの生まれ変わりではなかったかという結論に至るが、時はすでに遅く幸太郎を救うことはできなかった。ラストシーンで海岸に佇んだウタは祈りを捧げるがそれはどこにも届くことがなかった。ここで論者は、ウタにとってのアーマンは常に解釈を失敗に追いやる否定性の存在として機能していると指摘し、アーマンは生者による意味付けを拒み続けるものであると論じている。「魂込め」は解釈行為そのものを対象化しているとした上で、読むという行為は拒否されているという否定性を読むことでもあるという結論を提示している。

第四章は「希望」論である。この作品は、ある主体（主体の名前は最後まで記述されない）が米兵の幼児を殺害し犯行声明を出すところからはじまり、メディアのさまざまな反応を確認した犯人が焼身自殺を遂げるところで閉じられる。動作主体の名を記述しないこと。それは誰もがその主体になり得る可能性があることを示唆する。つまり、この作品は部分（動作）によって全体（主体）を示唆する提喩的方法で描かれているのである。このことから考察を開始した論者は、政治的に絶望している動作主体がその絶望に反論するようにして言葉を発していることを論証し、そこにこそ本来の意味での希望が託されていると結論づけている。

第二部は「読む」ことを問題化する死者たち」と題し、又吉栄喜と崎山多美の作品を論じている。第一章は「ギンネム屋敷」論である。この作品は、ギンネム屋敷に住む「朝鮮人」が「知恵遅れ」のヨシコーを犯したと聞いた「私」が金を強請ろうと企てるところからはじまる。だが、勇吉を伴ってギンネム屋敷に出向いた「私」にあっさり金を渡した「朝鮮人」は、自分がかつて恋人の小莉を殺害したことまで告白する。ここで論者は、野家啓一の『物語の哲学』（2005年）を参照し、「ギンネム屋敷」は物語るといふ行為のありようそのものを描いた作品なのだとし、「朝鮮人」の語りが女たちの声を奪う隠蔽機能を有していることを指摘する先行研究を踏まえつつ、そうした隠蔽行為が作品全体に張り巡らされていることを論じている。作品のエピグラフに「終戦後、破壊のあとをカムフラージュするため、米軍は沖縄全土にこの木の種を撒いた」という説明があることに着目し、物語るといふ行為が本来的に内包している「カムフラージュ」の機能を考察している。物語のラストシーンには物語る言葉を失った「私」が勇吉を殴りつける場面があるが、それは物語ることができないまま死んでいった小莉やヨシコーの「悲鳴」を「悲鳴」として断片的に伝えることにつながっていると論じている。

第二章で論じた「巡查の首」は、沖縄県・謝名元島で生まれ育った克馬と早紀の兄妹が、祖母・タキの遺言によって、その遺骨を祖父の首の隣に埋葬するため垂下国へと向かうところからはじまる。だが、かつて植民地であった垂下国で巡查をしていた祖父・功一郎を追悼することに対して、人々はさまざまな議論を重ねる。「英雄」として祭祀を行おうとする者、侵略者の汚名を着せようとする者など、それぞれの主義主張はいずれも対象物を持たないイメージとして拡散する。また、追悼を可能にする共同体そのものが存在しないことを知り、自らも夫とともに共同体から遺棄されることを望むタキ、祖父・功一郎を追悼するために垂下国の阿族を新たな共同体に再編成しようとする早紀、「報復」というかたちでの祭祀を主張する「部族長」などの思惑が交錯する。論者は弔いをめぐるさまざまな思惑を構造的に分析しつつ、その中心に功一郎の遺骨の「所在不明」を配置し、回復不能な喪失という状況のなかでポリフォニックな〈場〉が生成されていることを問題化している。

第三章では崎山多美「水上往還」が論じられている。主人公の明子とその父・金造は、祖母・マカトの位牌を持ち帰るために島の渡し守・カーレ爺を頼って「0島」へと渡る。だが、廃屋となったマカトの家で位牌の配置換えの「儀式」が行われているさなか家を飛び出した明子は、ヤマ芭蕉の林でマカトと幼い自分の姿を幻視する。翌日、カーレ爺の船で島をまわり、自殺をした松尾という男の話を聞いた明子は、廃屋のなかでマカトの位牌を固く握る金造を見る。帰りの船に乗った明子は、心のなかに「吹っ切れぬもの」があることを知りマカトの位牌を海に放る。論者は、この作品の語りが三人称であるにもかかわらず、まるで一人称の〈私〉が内在しているかのように夥しい身体性を伴っていることを指摘し、この作品の描写がすべて明子の身体を経由したうえで言語化されていると論じている。また、明子の認識には常に「影」としての祖母・マカトがおり、明子とマカトは「テキストとしての島」（花田俊典）という〈場〉において相互作用的に交錯しながら死者の記憶を呼び覚ましているとした。明子の解釈は父・金造のフェティッシュな感傷とは異なる相互的なものであり、この〈私〉がこの世界を生きることの現実を画定する行為なのだと論じている。

最後に補論として辺見庸『1★9★3★7』論が挿入されている。この作品の「わたし」は、1937年の南京大虐殺において「父」は人を殺したのかという問いから出発して戦争の記憶を紐解いていく。もし「わたし」が「父」と同じ状況であれば「わたし」も人を殺したのだろうかと自らに問い、シミュレーションを重ねていく。歴史資料、証言、小説、草稿などを読むことで生きる「イメージ」を「記憶」しようとする。

しかし、こうした「イメージ」の蓄積は常に不足と過剰を振幅し、見えない領域を作りだす。論者はそうした不断の営みにこそ『1★9★3★7』という作品の価値があると指摘している。過去の「出来事」が繰り返されるかもしれないという可能性を「読み」、それを「イメージ」しながら、自分も当事者になり得るという可能性を追求する作品と論じている。「出来事」を継承するということは、解釈者である自分自身の「読む」という行為性そのものをも問い直していく困難な試みなのだと結論づけ、それを本論全体に通じる問題として定位している。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論は、〈沖縄で書くこと〉の問題を内在させる「沖縄文学」の生成過程と現在までの到達を明らかにし、その可能性に迫ったものである。論者は、序章において「沖縄文学」の研究史と主な論点を的確にまとめ、沖縄をめぐるさまざまな「解釈」の欺瞞性を解き明かしている。「沖縄文学」をオリエンタリズムに閉座してしまおうとする思考に抗い、「解釈」の権力性、暴力性を批判する。また、「沖縄文学」における死、死体、死者、屍、遺骨の表象という問題系を導き出し、個々の作品を精緻に読み解いている。

本論の特徴の第一は、「沖縄文学」を歴史的、政治的な権力との接触をあらわす〈場〉と捉え、いま〈沖縄で書くこと〉の意味を問い続ける作家たちの表現活動を、権力関係を変容させるための闘争として議論を展開していることである。彼らの文学的営為を通して、「出逢うための他者」を必要とした戦後日本の欲望を逆照射していることである。日本語文学を内破する可能性を秘めた〈場〉としての「沖縄文学」を屹立させる試みを行なっていることである。

また、戦争の記憶とその継承が問題化した 1990 年代以降の「沖縄文学」において、死者とその弔いが重要なモチーフになっていくことに着目し、死者を解釈する者たちが常にその解釈に失敗していく過程を論じている点にも特徴がある。人々がなぜ死ななければならなかったのかを「出来事」の記憶として定着させるだけでなく、死者を都合よく解釈し、生き残った者の論理で彼らを慰霊する行為の欺瞞性、暴力性を明らかにし、解釈の失敗それ自体を解釈するという方法はこれまでの研究史にはみられなかった観点であり、今後の可能性を秘めている。

さらに、本論は文学テキストを読むという行為が必然的に孕むことになる錯誤性、すなわち、解釈者としてテキストと対峙する〈私〉自身もまた解釈に失敗し続ける存在であるかもしれないというテーゼを突き付けている。そこで問われているのは、読むという行為を通して読者自身が変容することの出来事性である。文学テキストを解釈するということはどのようなことなのかをめぐる原理的な探究である。

### (2) 論文の評価

「沖縄文学」に関する先行研究を適切に踏まえつつ、「沖縄文学」における死者と弔いの表象という鋭利な切り口で問題編成を試みている点、死者を解釈するという行為そのものの欺瞞性を明らかにし、文学作品を読むことの権力性、および、読む主体の変容を問題化しようとしている点において高い学問的価値をもった研究である。「解釈」に失敗し続ける人々を読むという試みは極めて斬新であり大きな可能性を

秘めていると考えられるため、今後は読書行為論、空白理論、解釈学などを深く学び、自身の方法をより論理的なものにしていくことを期待する。

〈沖縄で書くこと〉を考え続ける作家たちの文学的営為を正しく受け止め、表現の細部を読み解くことで応答しようとする姿勢が貫かれている。補論として収録された『1★9★3★7』論に関しては「沖縄文学」との関連性がやや見えにくいという指摘もなされたが、作家・辺見庸が「父」の戦争体験に向けてどのようなアプローチをしているかを検証することによって、死者を「解釈」とはどのような行為なのかを学び、それを自らの分析にも援用しようとする姿勢は明確に示されており、補論としての狙いはよく理解できる。

各論に示された知見はその多くが高度な研究水準に達しており、今後の「沖縄文学」研究の可能性を切り拓いた内容になっている。特に第一部第二章に収められた「面影と連れて」論は、近代文学研究の領域において最も多くの学会員を有し、最も採択されるのが難しいとされている（採択率は10%前後）査読雑誌『日本近代文学』（日本近代文学会）に掲載された論文であり、論者の研究能力が卓越していることの証左となっている。